

〈資料紹介〉

英一蝶筆「盃回し・狙公図」二幅対

本学所蔵

口絵写真 双幅（部分）

武田恒夫

本図<sup>図1</sup>は、平成二年、美術資料収集の一環として本学に所蔵されるところとなった作品である。紙本著色の双幅形式であるが、極度に縦長の画面構造をとる点に特徴を示す。小稿では、以下、題材、筆者、伝来の点にしほり、順を追って紹介を試みることにしたい。なお、本図の表装裂に関しても、参考に資するものがあり、特に本学切畑健教授の覚書をえたので、別記としてこれがかかげた。

本文中※印をほどこした作品は、末尾に図版掲載の所在を示し、挿図は割愛した。

一

双幅ともに細い棒状のものを使用する曲芸を題材としているが、「盃回し」・「狙公」という題材は、後でもふれるように、英面系の高嵩谷極めの箱書による。

いうまでもなく、盃回しは大道芸人の離れ業の一つで、先端に盃をのせた細棒を鼻下に立てて盃を廻転させる見世物である。図では、後手に扇子をもち頭巾をかぶる芸人<sup>図2</sup>は着流し姿で、左肩をはだける恰好で、上半身の動きを巧みにあらわしている。傍の小童<sup>図3</sup>は、興奮気味に上方を指さして盃を見上げている。寛永期の静嘉堂「四条河原図」<sup>\*</sup>二曲屏風一対の一隅にみいだされる掛け小屋の中で、犬の輪くぐり芸に隣

「盃回し・狙公図」



图1 双幅全图



図3 小 童



図2 盃 回 し



図5 猿の逆立ち



図4 狙 公



図6 小 童

「盃回し・狙公図」

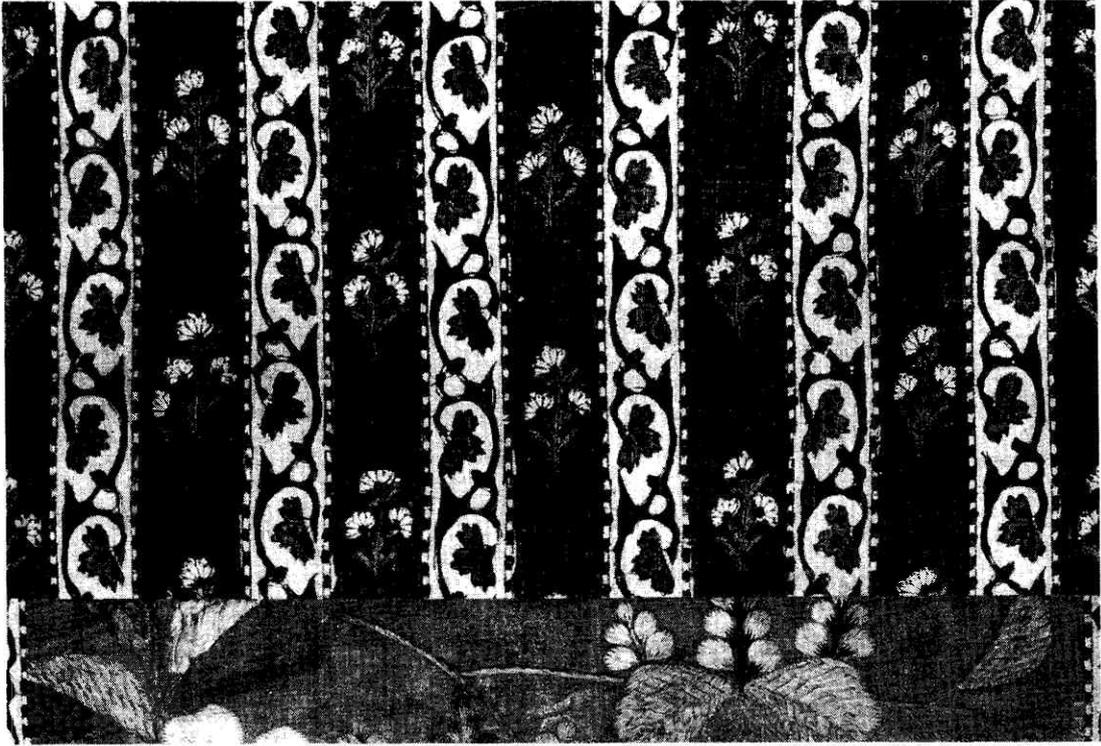


図8 表装裂(盃回し図)



(狙公図)

(盃回し図)

図7 落 款

接して、椀回し芸が描かれている。河原での種々の見世物小屋に立ち交って、結構客寄せに成功しているところを見ると、人気のあったことがわかる。手品や小切子こきりこを操る放下師の系類であるが、八打鉦や八桴やっばちが中世より成立しているところを見ると、江戸時代以前に盃回しも成立していたことが推測される。

狙公とは、猿廻しの芸人をさし、古くは猿曳きとも呼ばれた。猿曳きは室町時代の「三十二番職人歌合絵」に登場し、サントリ―美術館本（幸節家旧蔵本）では第二番に獅子舞と対向して描かれている。おそらく共に正月の祝福芸として組み合されたものであろう。近世初期の洛中洛外図屏風などの風俗画にも屢々大道芸人の姿でとらえられている。中世にさかのぼっては、『吾妻鏡』の寛元三年（一二四五）四月二十一日の条によると、左馬頭入道の足利義氏が美作国から芸達者な猿を召し寄せて観賞したという。どのような芸内容であったかは不明である。図では、狙公図4が袖なし羽織に袴の出立で脇差をさし、ついた膝に棒を立て右手に鞭をもって棒先の猿を見守るところ。傍に道具の被り物が置かれ、鬘かざらをつけた猿は衣装をまとい扇形の把手を握って逆立ちしている。傍の小童図6は両手に撥をもって締め太鼓でリズムをとっている。しかし、かかる猿の曲芸を描いた例は珍しい。猿が鬘をつけ衣装を身につける例は、歌舞伎者の真似をさせた猿芝居などともに、さほど古いことではない。元禄期あたりの太平の時世にふさわしい見世物であったと思われる。

双幅ともに、背景は全くの余白で処理された軽妙洒脱な画面となっている。

二

双幅の何れにも落款図7がほどこされている。「盃回し図」の右下端には、「英一蝶書」の署名と朱文方形「信香之印のよか」印が認められる。「狙公図」では左下端に同様の落款をみるものの、その捺印は逆倒されていて、おそらく後で筆者の英一蝶（一六五二―一七二四）は気付いたのであろう。「老眼逆印」の添書をつけている。老眼と言いつくしているのが興味をひくが、事実一蝶落款と晩年注2作とは矛盾しないのである。

本図の落款にみる英の姓は母方の花房氏からとったとする説がある。一蝶という画名の使用は、周知のように、元禄十一年（一六八九）三宅島へ配流注3され、この地で十一年過した彼が、宝永六年（一七〇九）赦免をえて江戸に帰還して以後のものといわれている。その由来

については、一朝の悪夢であった遠島を回顧して、胡蝶となった莊周の夢にもたとえて、心機一転、踏ん切りをつけたものであろう。一蝶の画名とともにしばしば用いられた「北窓翁」の画号も、陶淵明が北窓に臥し夢に義皇の人となった故事からえたとすると、何れもその由来は同様の心情に裏づけられる。一蝶の画名は、江戸後期においていよいよ著名となり、芝居の上でも人気を呼ぶにいたって、荒唐無稽とはいえ役の名にまでなっている。また、浮世絵界では一蝶の直系四世の一珪に師事した歌川国貞こと豊国三代の号が、香蝶楼であったのは、「信香」と「一蝶」の一字をとったものとして知られている。

「信香」という印文は、一蝶の諱であって、「信香之印」印は初名の藤牛磨や多賀朝湖と称した時代から使用され、晩年に入ってからの諸画面にも引き続き認められるので、本図もその一例とみてよい。

一蝶を名乗ってからの諸画面は、三宅島でのうつ屈を打ち破るかのように活気づく。最晩年の沈静化する傾向にくらべると、江戸帰還の当座は、そのころの江戸市中や田園での風俗を対象とする制作が中心となっている。いくつかの「雨宿図」\* 屏風やフリア美術館「田園風俗図」\* 屏風、ボストン美術館「江戸月次風俗図」\* 屏風など、世に知られた名作はこの時期の作品とみることができる。いずれにしろ、江戸に戻ったことで一蝶は英気を取り戻した感がある。

本図もまたそのような系列に入る遺品とみて差しつかえない。抑揚にとむ濃墨の描線を自在に駆使して、それをいかすかのように淡彩をほどこす。登場する四人物は、何れも斜めポーズで上向かたちをとるが、その不自然に近い容態での緊張と興奮の表情は、むしろまことに自然である。伸びやかな曲線や打ちこみの鋭い描写を交互に併用して、衣文の巧みな表出をはかるにあたり、人物描写に卓抜な手腕を発揮した一蝶の面目躍如たるものがある。背景は全く余白をもって処理され、それだけにこれらのモチーフの動勢が明快にとらえられることになる。また、本図のような特殊に縦長の画面も、晩年の他の作例<sup>注6</sup>には屢々見受けられるところである。施主の意向をくんでのことであろうが、かかる柱絵もどきの画面スペースにあえて挑戦するかの如く、機知的な構図のおもしろさをねらっているところにも、一蝶画らしい特色を指摘することができる。

本図は、二重箱に収められ、図8別記表装においては更紗裂の中廻しに、繡箔裂の風帯や上下一文字を用いるなど、趣向にとむ体裁をとることからも手篤く扱われながら伝世してきたことが解る。

内箱の蓋表には「盃廻し 狙公 英一蝶筆」の墨書銘、その蓋裏には「高嵩谷誌」の署名と白文方形「嵩谷」方印が認められる。図9江戸時代後期に江戸画壇でその画名を知られた嵩谷（一七三〇—一八〇四）は、佐脇嵩之（一七〇七—七二）に画法を学び、その嵩之はまた一蝶晩年の弟子に当る。したがって、嵩谷は嵩之を介して一蝶の孫弟子ということになり、嵩谷による外題は、一蝶画系による鑑識を経たものとみることが出来る。嵩谷は一蝶画の模作を盛んに手がけたことで知られ、一蝶の人物画法を学んで武者絵を得意とした。一蝶画認識に果たした功績も大きく、英派中興の画人と称されている。

ひるがえって、外箱の蓋表にも「二幅対左盃回右狙公英一蝶筆」の墨書銘をみるが、むしろ蓋裏に本図の来歴が図10墨書されているのが特筆される。その文面は左の如くである。

文化十二乙亥歳十二月六日為「天樹院様御遺物拝領之」 直好

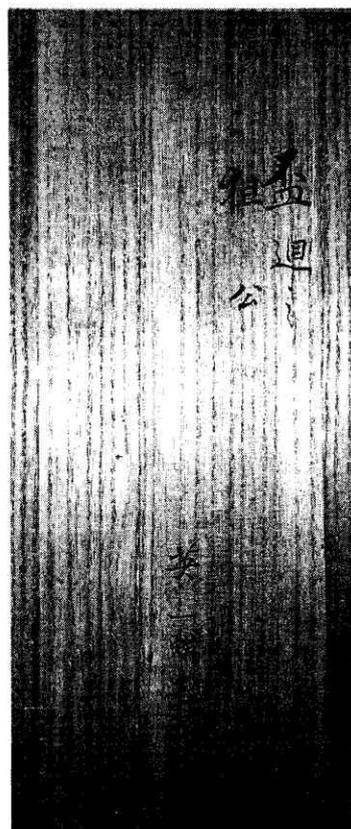
右の直好にそえられた貼紙に、朱文方形「秋田侯章」印が捺されている。「天樹院」は、『読史備要』の「法号并称号索引」によると、「天樹院泰義凌雲 佐竹義和」とある。即ち、天樹院は佐竹義和よしまさの法号であって、文化十二年（一八一五）七月八日に他界している。「直好」なる人物については不明であるが、義和死去四ヶ月後に形見分けとして拝領したものと思われ、貼紙にみる「秋田侯章」の印がその証左となろう。拝領とあることから、直好は、たとえば義和の家臣といったかなり身近かな存在であったにちがいない。

ところで、『古画備考』六「武家」の佐竹義和朝臣の項には、「従四位侍従右京大夫羽州久保田城主寛政中」の人と註され、書画をたしなんだ模様で、木挽町家の絵手本や伊川院いづのいん栄信に学ぶところがあった。松平定信晩年の『花月日記』によると、文化十一年十月十九日条に「秋田の君」として義和が「珍藏の信実の六々歌仙の類」つまり著名な佐竹家旧蔵本「三十六歌仙図」や兼好法師による古今集の註に後醍醐帝

「孟回し・狙公図」

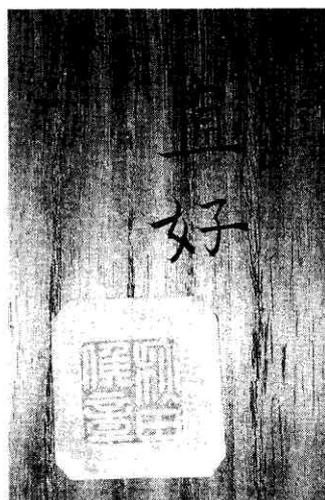


(蓋表)



(蓋裏)

図9 内箱墨書銘



(蓋表)



(蓋裏)

図10 外箱墨書銘

の宸筆を加えたものを持参したと伝えている。『日記』では秋田藩主を示唆しているようで、義和については太田亮編『姓氏家系大辞典』によると、佐竹義敦の嫡子となっている。近世学芸史家森統三氏によってさえ、義和は秋田藩主義敦こと曙山と混同注7されている。この秋田侯の佐竹家については、安永・天明期の頃藩主であった曙山（一七四八―一八五）が世に知られた名君で秋田蘭画を発展させたプロモーターでもあり、みずからも洋風画を描いたことで名高い。曙山の初名は義直といい、曙山の家臣で秋田蘭画の中心作家であった小田野直武（一七五〇―一八〇）と本図を拝領した直好とを考え合せると、名前の一字をいずれも共通させている点が興味をひく。さらに、本図がその後も佐竹家に伝世注8したことは、その後、本図が或る時期に再び佐竹家へ戻されたものと理解できる。それは直好の手からであったか、或はそれ以後かは不明である。

嵩谷は、文化元年（一八〇四）に没しているから、この箱書を行った時期は、義和がなお生前所持していた段階で、おそらく江戸において義和の側から外題の依頼を受けたものと推測できる。

#### 表装裂覚書

絵画や書跡の鑑賞にあたっては、従来、その表装に注目することが充分であるとはいえない。当然ながらそれぞれの表装には意を用い、工夫をこらして裂地を取り合せ、本紙をよりよく見せることに力を尽した筈である。中には裂そのものが本紙よりも注目されるという場合さえもあっていっ注9つよい。

さて本対幅の表装は、縦長の本紙の特色をよく生かして両の柱を極端に細く扱った、きわめて瀟洒な構成になる。上下は少々やつれた淡浅葱北絹紬。

中廻しは銅板更紗で、萌葱と白筋を交互とした縞。萌葱筋には小さな立花の一枝つつを縦方向に並べている。それには白花をつけ茎と葉を藍とする。また白筋には茜の花を仰伏交互とした唐草を連続しておさめる。葉や蔓は萌葱。

この意匠の更紗はほぼ同様の裂が別に伝えられている（更紗尽し掛軸へ浅見家伝来）。それは十七世紀インドの作と考えられていて、さすがに大らかな作行きであるが、この表装裂はオランダ十八世紀末の、整然とした趣きがその特色となる。

一文字・風帯には特に注目される裂地が取り合わせてある。一見して桃山時代の繡箔裂であることがうかがわれ、当初は小袖などに用いられていたものである。生地は練貫で、二つ入りの箆目のある典型的な近世初頭の特色をしめす。風帯の一部には数種や約一種幅の白地の部分があって、わずかの裂地で次のように考えるのは早計ではあるが、紅地に白段が鮮やかな小袖裂であったといえよう。

また紅地の部分には現状ではほとんど剥落しているが金摺箔で綾杉形あやすぎがたをあらわす。繡は枝垂れ桜を地に、桃山時代特有の形姿をしめす桐紋を上文様に置く。風帯の一部に菊花の片鱗がのぞき、他の当代意匠と相通ずるように、季感をそろえない多種の植物に桐紋を配した華やかな衣料であったことがしのばれる。

このように軽やかで染の美をしめす更紗と、紅地に金摺箔と刺繡の重厚華麗な繡箔との出会い、それはまた外国と日本、あるいはまた作期がへだたった二種の裂地というように、意表をつく取合せの面白さが目ざされたことをうかがわせる。そしてそれは本紙の見事に瀟洒な画風に仕上がって、よりいっそうその特色をきわだてようとしたのであることはいままでもない。

(切畑 健)

## 注

- 1 法量 各九八・五×二三・〇糶
- 2 天保十年(一八三九)の山崎美成著『三養雜記』(『古画備考』四十四「英流」所収)によると、一蝶の孫弟子高嵩谷の話として、晩年の一蝶は手がふるえて、月を描くのにぶんまわしを用いたと伝えている。本図ではそのような形跡はないものの、逆印などの始末はいかにも老境にありがちな事態として受けとれる。
- 3 三宅島遠島については、『古画備考』四十四「英流」の項に収録された「民蝶半記小伝」にもふれているが、真相は諸侯や旗本の吉原遊興を手引きして、いわば太鼓持ちのような悪所通いが目立った。それが、当時の將軍実母桂昌院の縁者におよぶにいたって、ついに断罪となった。しかし、赦免の理由は、綱吉他界にとまなう生類憐みの令解除によるもので、一蝶が「馬の物言う」と皮肉ったかどで入牢したことが表向きの罪状とされていたらしい。
- 4 『画師姓名冠字類抄』に収録された蕙苑陋夫による「北窓翁」の説には「北窓」と「蝶」のそれぞれの故事にふれている。左に全文を写す。  
北窓翁  
黄帝者遊華胥致太平。莊周者化蝶不知周。淵明者臥於北窓為義皇人。一蝶子何所取焉。蓋黃帝者上古聖神不可及也。當倚於彭沢之北窓為漆園之夢者乎。而莊氏齋万物以虛無立宗旨、淵明重倫理以仁儀為節操。其所尚也、不無町畦歟。夫人之在世棄倫理可乎。無仁義可乎。然則雖愛栩栩之變幻、無北窓之清風、於道味或有缺乎。是以号北窓翁云。  
仲春日  
山東京伝の黄表紙『郭中丁子』は、和莊兵衛の子の莊子郎が蝶尽しの夢を見るといふ筋書だが、登場人物の役名には全て蝶の字がつけられる中で、英一蝶は実名で登場する。
- 6 「英一蝶」落款をもつ双幅で縦長の画面形式をとる作例として、「社人・順礼図」各九七・三×一七・五糶。「高雄土器投げ・鞍馬畜下し図」各九四・八×二四・五糶東京芸術大学芸術資料館。「花鳥図」各一〇六・五×三五・六糶東京国立博物館。一幅の例として「桧に蟬図」八四・一×二四・七糶、荻野美術館。

「盃回し・狙公図」

- 7 森銃三「谷文晁伝の研究」四十一末尾（『森銃三著作集』第三卷 人物篇三 所収）
- 8 大正六年の「佐竹侯爵家御蔵器入札目録」には、「一蝶 盃廻シ 狙公 高谷箱 双幅」とあり、佐竹家の什物として伝来したことを告げている。ちなみに、売立目録では当時四千百三十円の値がつけられていた。

### 図版掲載所在一覧

- 「四条河原図」二曲屏風一双 静嘉堂 『日本屏風絵集成』（祭礼・歌舞伎） 図版67・68
- 「雨宿図」六曲小屏風一隻 個人蔵 『日本屏風絵集成』（四季景物画） 図版78
- 「田園風俗図」六曲小屏風一双 フリア美術館 『在外日本の至宝』（障屏画） 図版41・42
- 「江戸月次風俗図」六曲小屏風一双 ホストン美術館 『在外日本の至宝』（障屏画） 図版112・113